



Title	口語英語に於ける「～したほうがよい」の表現について
Author(s)	小谷, 晋一郎
Citation	Osaka Literary Review. 1968, 7, p. 34-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25793
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

口語英語に於ける

「～したほうがよい」の表現について

小 谷 晋 一 郎

1. 英語の「～したほうがよい」の表現はいろいろあるが、ここでは非常に多用される ‘had better’、それほどでもないがかなり用いられる ‘would rather’ とその類似表現， ‘may as well (might as well)’、の各語法について口語英語に於ける意義、用法、及各語法の差を考究したいと思う。話者及び主語との関係を中心に、 had better と他の二語法を比較しながらみしていくことにする。資料は主として、1930年以降の劇、映画シナリオ、推理小説、会話の多い少數の文学作品よりえらんだ。（30年以前のものも多少入っている）英、米の作家、作品は大体等しいようにえらんだ。集めた例文の数は次表の通りで、米英の差は特に述べている項目以外は認められない。

	had better	would rather	may (might) as well
①	220 (2)	29 (3)	60 (5)

() 内の数は会話以外のところで用いられたものである。これを見ても ‘had better’ が圧倒的に多用されていることがわかる。本研究もこの構文を中心に展開していく。

2. had better 構文について

2. 1. 形式：英文法辞典（三省堂）には「アメリカ英語では had は 'd より更に進んで全部省略してしまう傾向にある Fowler は had は find の意の本動詞であるから略することは不可能だと教えてい [...]」

ところからみて、イギリスでは多少行なわれている現象かも知れない。」とある。これを米英両語についてわけてみると次表の結果が得られた。無主語文は Better go. のように had の全くないものである。

	had better	'd better	better だけ	無主語
② 米	11	77	16	16
英	10	69	3	15

上の統計をカイ²乗検定により検定すると、危険率 5% で有意の差があるのは had を全く略した better だけ用いているのだけである。即ち米英両国とも 'd と had を略するのは最も多く用いられ普通のことであるが、英國では You better go. の形は米国ほど用いられないといえる。had better と had を全部残しているのは少数であり、略されなのはそれなりに理由があるようだ。即ち形式ばった時即法延などでの言葉とか、主語との関係、it had better, you all had better, Teddy and I had better, American girls had better etc. のような場合である。

2. 2. had better 構文の主語と単文に於ける用法: 「had better は二人称の主語で忠告を意味するに用いるとよくいわれるが、實際は人称に關係なく用いられている」と英文法シリーズ「形容詞」に述べてあるが、この主語との関係を調べてみると次のようになる。

	I	we	you	they	he	無主語	計
③	44	28	96	2	19	31	220

無主語も主語は you であるから、二人称が過半数を占めていることになる。二人称主語とそれ以外の主語の場合の例の合計をカイ²乗検定によれば有意の差をみとめられる。次に had better が単文に用いられた場合

をみていく。主語別にわけてみると次のようになる。

④

	I	we	you	they	he	計
	16	10	50	1	6	83

こゝでも *you* が過半数を占めるし、検定によっても *you* が他の主語の合計よりも多いことがわかる。外国人教師が日本人に英語を教える時よく注意することの一つに、「*had better* というのは一種の命令であるが、日本人は相手かまわず使う傾向があるから注意する必要がある。」といいうのがある。上の例の話し相手を調べてみると83例中目上の人を使っているのは5例しかなかった。これらも、ごく親しい目上の人、即ち親とか、秘書が備用者に対する時といった場合以外は認められないようだ。他はすべて同じ立場の人や目下の人に用いられたものである。*I, we* を主語とした文で気がつくことは *go* などの場所の移動を表わすものや、情報伝達の動詞が特に多く認められる。

We'd better go and meet them, Arnold. — W. S. Maugham, *The Circle* / *I'd better be getting back upstairs.* — Ellery Queen, *The Scarlet Letters*

you の場合、進言、勧告、命令、脅迫と種々あるが、忠告、命令が一番多いようだ。

You'd better read Donald Lam's letter first, Mrs. Cool. — E. S. Gardner, *Bats Fly at Dusk* (秘書→僱主へ)

My, that girl just hates me, doesn't she? You better tell her I'm your brother's girl. — *East of Eden* (～しておやりなさいよ、勧告)

It sounds a bit obscure. You'd better go over to Danemouth at once, Slack. Report there to Superintendent Harper, and co-operate with him. — A. Christie, *The Body in the Library* (主任部警→警官、命令)

Stranger: (with a flash of menace) You'd better. (To MR P.)
 Now, Sir! — A. Monkhouse, *The Grand Cham's Diamond* (強盗のことば)

ここで注意すべきことは否定文が83例の単文中たった2例しかないことである。諸種の文法書には必ず例文があがっていることからかなり例文が集まると思っていたが全く予想外であった。この少ない理由を考えてみると, *had better not* のとき *had better* ≠ *should* であって, *should not* で一般に表現されているものと思われ, 又 *had better* は話者の「望ましいこと」を表現する(積極的に) *expression* であることを物語っているものと思われる。同時に英語に於ては劣勢比較 *less~than* が余り用いられぬことも考えあわせたらよいと思われる。

Delighted, old man. I'm not in it. But you'd better not slug the lady again. — Raymond Chandler, *Playback*

上述の *you had better* ~ で命令を表わす場合が多いことを述べたが, *you* を全く省いて主語のなくなっている例は31ある。話者の好ましいことへの気持がでているため普通の命令文よりもやわらかな感じを与えることが多い。*you* のある文より無主語文の意味の方が強いとはかぎらないようだ。次の例は命令文への移行を示すものと思われる。

You can either carry on, or better go home and leave the cursed thing till tomorrow. — F. W. Crofts, *Mystery in the Channel* (副社長→社員) 否定無主語文は4例あるが割合から云うと肯定の場合よりも多いのは禁止をやわらげているからであろう。Perhaps *better not.* の例でもわかる。

'Better call to Lutts,' Mason said, 'and get him to come down.'
 — E. S. Gardner, *Nervous Accomplice*

疑問文は全部で8例である。主語別では I—2, we—4, you—2である。Iの場合は2例共 alternative question であり, we, you, の場

合は否定疑問文であって、いずれも Yes, No を期待する純粹の疑問文ではない。I の場合は Should と殆ど等しいようだ。自分のしたいことを相手に聞くわけはないからである。we, you の場合相手の意向を聞く問になっていると解釈してよいと思われる。即ち Shall we ~? Will you ~? と等価である。

'Should I,' he asked, 'have the gun in my hand, or had I better put it in my pocket and pull it out? — E. S. Gardner, Smoking Chimney

I saw something just then. Hadn't we better draw the curtain?
— Lord Dunsany, *A Night at an Inn*

2. 3. had better 構文の *neutralization of assertiveness*: さきに述べたごとく、had better 構文は相手に忠告、命令する文であって、無礼であるとさえ感じられる表現になってしまっている。元来この語法は仮定法で、形態上は独立文であるが意味上から云うと言外に条件を有する一種の主文であるということは諸学者の説くところである。英文法シリーズ「法、助動詞」には「細江「叙法の研究」には条件文を含んだ例は同書にないのでこゝにあげよう」と1例あげてある。この had better 構文に不要と思われる条件をつけること、及びその他の方法によって、その表現を和らげる表現がいろいろ発達している。先づ条件を明示した主文に用いられた例を見ていくと、全例21中主語別は you が16例で大部分である。条件は if clause によるもの、and, then 等により先行の等位節に条件を表わしているものである。これらの条件により had better の主張がよわめられ説得的になっているように思われる。

So we'll go to one of the little places in the Quarter afterwards and you'd better give me some money. — T. Williams, Streetcar Named Desire

If we've got to talk it over we'd better take it as calmly as we

can. — W. S. Maugham, *The Sacred Flame*

次に副詞の *perhaps*, *maybe*, *probably*, *well* を文頭において *had better* の文を和らげる形式がある。主語別に見ると次のようになる。

	I	we	you	he	計
⑤	7	3	13	2	25

条件明示の場合に比べて I の例の多いのが目立つ。これは前者の場合話者は条件は自分の心の中で判断し、望ましことのみのべればよいのだから少ないので当然であり、you の場合相手を説得するため条件を明示する必要があるので you が多いのである。こゝではこの文副詞は話者の確信を弱めているのであるから you 以外の他の人称にもかなり見られるのである。

“*Perhaps*,” said Smiley, “before we go any further, I’d better give you my news.” — J. L. Carr’*e*, *A Murder of Quality*

Maybe you’d better get off right smart and restore that baby.
— J. Galsworthy, *Little Man*

neutralization の形式中一番多用され、一番強力に働いているのは従属節中に *had better* を用いる形式である。従属節中に用いられている例は 58 あるがこのうち 48 例は *think* 及その類似の動詞の目的節に用いられたもので、他は伝達動詞の目的節に用いられたもの 7 例、関係詞節、疑問詞節 3 例であった。本項の目的には前者のみとり上げていく。この場合動詞は *think*, *guess*, *reckon*, *mean*, *decide*, *suppose* である。 *I think you’d better go.* のような形である。

	I	we	you	they	he	計
⑥ think の主語	44	2	1		1	48
had better の主語	16	11	16	1	3	48

元来 *had better* は話者の望ましいことを表わす表現であるから, *think* の如き動詞を前に置く必要はないのである。然るにこのように多く用いられるのは *had better* 構文を *semanteme* として固めて *neutralize* し, その主張性を弱めるためになされたのである。主節の動詞が *I* であるのは当然であるが, *I* 以外の主語も存在することは注意を要する。このことは, *had better* が, 話者以外の人が (即ち主語) 「したほうがよい」と考えることも表現できることを示しているといえる。従属節の主語は *you* が多いのは当然であるが *I* の多いのも自己主張を控え目にする表現と考えていくとよくわかる。*we* の場合は一種の勧誘を表わしている。

I think you better get down there. — East of Eden

I think I'd better tell you something. — A. Christie, Dead Man's Mirror

‘Well,’ the sheriff said, ‘I guess we'd better go in. How about it, Frank?’ — E. S. Gardner, *The Case of the Smoking Chimney*

次の例は今迄述べてきた 3 つの *neutralization* の式が同時に用いられている。

Well, we don't get on too well together, and I thought perhaps I had better take rooms somewhere. — A. A. Milne, The Boys Come Home (或青年が保護者である叔父に云う云葉). 以上単独で *had better* が用いられた例と *neutralize* された *had better* とをみてきたが, 前者の例は 113 (無主語文も含む), 後者の例は 104 である。カイ 2 乗検定にかけてみても危険率 5 % で有意差はない。即ち両者半々に用いられているといえる。

2. 4. *had better* 構文の *Tense, Mood, Voice* 文法書には「*had better + 原形*」の単純形と, 「*had better + have + 過去分詞*」の完了形をあげ, 又 Jespersen も ‘Essentials of English Grammar’ で後者の例をあげて *frequent* であるといっている。然し私の調べた範囲では後者は

1例も見あたらなかった。このことは口語英語では *had better* の完了形の使用は稀であるといってよいと思う。このことについて宮田幸一氏は Question Box で、「*had better have + 過去分詞*は音声上二つの *have* を含み不体裁であり、且つ *should have + 過去分詞*で表現されうるため頻度は多くない」と指摘している。次に「*had better + be + 過去分詞*」も一例も見出されなかった。二人称を対象に勧告する表現に受身形が見出されないのは当然であろう。又 *had better* は叙想法の前提節、帰詰節の中に用いられた例も1例も見出されなかった。叙想法の用法から出発しながら現在は用いられず別の機能を果しているわけである。

3. would rather 及びその類似構文

この形式はいろいろあるが私の集めたのは *would rather*, *would (just) as soon*, *would sooner* の3形式であった。*had rather* と *had* がはっきり出た例は1つも見当らなかった。*would sooner* の形は英國作家にだけしか見出されなかったから *Briticism* とみなしてよいではないかと思われる。*had better* が口語に於て多用されるのに対し、この形は全体で29例で前者の1割強にすぎない。少ない理由はいろいろあると思うが同じ内容を表わす表現が他に多くあり、又 *had better* ほど口語的でないのだろう。主語別の用例表をあげると次のようになる。

	I	we	you	they	he	計
would rather	6		5	1	3	15
would as soon	3				1	4
would sooner	8				2	10
計	17		5	1	6	29

主語の「～したいと思う」の表現であるこの形が、Iを主語とするのが

多いのは当然であろう。又気のつくことは *we, they* が後者の 1 例以外はないことである。このことは、この表現が個人の意志を表わすもので、*had better* のように勧誘的ない、方を余りしないではないかと思われる。*they* の例も 1 人 1 人の考え方をのべているものである。

You'd rather sleep with me, wouldn't you, Daddy? Charles Marowitz, *The American Dream*

I'm getting fed up with the whole business; I tell you that straight. I'd just as soon chuck it. — W.S. Maugham, *Our Betters*

Trade's rotten bad, the Lord knows, but I swear I'd sooner be without Breen's custom. — J.J. Bell, *Thread O' Scarlet*

次に話の相手をみると全体の中 8 例は何らかかしこまって話をするような人になっており、*had better* の場合よりていねいである。又 *had better* の場合比較を文の中に表わした例は一つもなかったが、*would rather (sooner) …… than —, would as soon …… as —* と表わしたもののが 5 例見られ、比較の感じがつよいようだ。又 *had better* には否定構文を使わぬ傾向があつたが、*would rather* にはそのような傾向はみられず、5 例あった。

The Chief Constable would sooner cut his throat than call in Scotland Yard. — J.L. Carré, *A Murder of Quality*

had better には *neutralize* する形式が発達していたが、*would rather* にはみられない。主語の意志を表わす表現で、話者の主張がないことを考えると当然である。叙想法の用法はかなりあり 6 例見出される。*would rather* を他動詞句的に働き後に叙想法をしたがえたもの、*would rather have + 過去分詞の形* と二様式が見られる。

I never showed him my love, I would sooner have died, and...
— W.S. Maugham, *The Sacred Flame*

Mrs. Barker, I'd much rather you came into the kitchen for that

glass of water, what with Grandma out here, and all. — C. Marowitz: *The American Dream*

以上のようにこの構文は意義は 1 義的で、主語の望ましいことを表わし、比較の意味を強くとぐめ、想念的色彩が濃いように思われる。

4. may as well

OED の well, adv, as well の説明に ‘With may, might, had etc. implying equivalence or equal result of one action in comparison with another’ とあり1440年の例が最初である。現代口語ではかなり用いられ had better の例文の 4 分の 1 強にあたる 60 例集まっている。元来この may は認容を表わすもので、話者の気持を表現し、その点で had better と共に通している。又 as well …… as not の後の部分が省略されることにより比較の感じが強くなってきたのであるが、この比較の点でも had better に類似し、現在では同じような意味に用いられているのである。又 I, we を主語とする場合 would rather に近づくのである。辞書に於ける may as well の取扱いは may の項に入れているものと well の項に入れているものとある点からみても、2 つの意味がはっきり出ていて扱い方にも 2 通りあることがわかる。may as well と might as well とでは多少ちがった点もあるので別々に扱うことにする。

4. 1. may as well: 主語との結びつきをみると次のようになる。

⑧	I	we	you	they	he	計
	9	7	9		3	28

had better の場に比べて I, we の割合が高いことは前者よりも相手に命令するという色彩が少ないとみてもよいではないかと思われる。命令文がないのは当然であるがその点も may による主張が命令よりもやわらかである。

(娘) : Nothing darling. (母) : Then I *may just as well* save my breath away before he goes. — W. S. Maugham, *The Constant Wife*

‘Okay,’ he said wearily, ‘you *may as well* go home, Della. Tomorrow could be the most disasterous day in my legal career.

— E. S. Gardner, *Blonde Bonanza*

‘When we’re here, we *may as well* start the sergeant on it at once,’ he said on his return. — F. W. Crofts, *The Mystery in the Channel*

we may as well は *let’s* と同じような意味に用いてある例が多いようだ。地の文に用いられた例は 1 例も見あたらない。疑問文は付加疑問に 1 つあるだけであり、又否定文は 1 つもない。認容の *may* の否定は *can not* であるからるのは当然であろう。

次に *had better* には主張を和らげる形式があったが、*may as well* にも同様な形式がある。

⑨

単独	<i>if..., ~may as well</i>	<i>Perhaps~may as well</i>	<i>I think~may as well</i>	計
11	10	4	3	28

I think ~ が *had better* では最多であったのに、*may as well* では最少であり、又こゝでは条件文の主節に多い。これは話者の主張が *I think* ~ として和らげる必要があるほど強くなく、条件文で十分まにあう程度であることを示していると思われる。‘～したほうがよい」という意味だといわれているが多少内容にづれのあるものもある。例をあげると。

It’s not what I say to my patients, Superintendent, but a man *may as well* wear out as rust out. — A. Christie, *The Body in the Library* (比較がはっきり表われているもの。このような例はこれ一つであった)

Under the circumstances, Donald, I think you're going to take me to dinner, and you *may as well* call me Lucille. — E. S. Gardner, *You Can Die Laughing* (認容)

又場合によれば *may as well* は *had better* 以上に無礼な表現になる。例えば *You may as well go.* (お前はこゝに用はない。いってしまえ。) 次の例はこれにあたるようだ。‘I tell you you're too late,’ said John. ‘*You may as well know* at once that I've proposed to Annie and she accepted me.’ — A. Bennet, *The Silent Brothers* (兄弟が一人の女性を争っている時兄の弟への言葉)

以上のように *may as well* は主として *had better* の婉曲な表現になっているといえると思う。

4. 2. *might as well*: ここでは主として *may as well* との関係に於てみていく。 *might* は他の法助動詞と同様過去形であるから *may* よりも想念的色彩がつよく、丁寧な表現である。主語との関係をみていくと、三

⑩	I	we	you	he	計
	8	5	10	9	32

人称の例が *may* よりも遙かに多く、会話文以外の地の文に用いられた例は5つあった。

このことは主張性が極めてうすく、話者の想念の表現となっていることを示すものと思われる。会話中の例をあげると。

Happy: Hello, girls, sit down.

Miss Forsyte: I guess we *might as well*. — A. Miller, *The Death of a Salesman*

この例は *may as well* と余りかわらないと思うが次の例は丁寧である。

‘... but as a matter of fact, while we have this opportunity I should be glad if you would answer one or two questions. I should have to ask them sooner or later and it strikes me we

might as well get them over. — F. W. Crofts, *The Mystery in the channel*

neutralization として述べてきた形式はここではもうその名に値しないように思われる。即ち *may* の表⑨の集計を *might* にしてみると *I think* の形が10例あって他の形よりも遙かに多いが、これは *might as well* の主張をやわらげるというよりも、想念を強めたものととれる場合が多いということである。「～たほうがよい」がよわまって「～してもよい」となった例はかなりあるようだ。叙想法の帰結文に用いられた例は2つある。又「*might as well have* 過去分詞」の形が5例みられ「～したほうがましだった」と遺憾の念を表すようになっている。

What did I do before? Turf, ring, hunting, gambling, and — I *might as well* say it now — women. Then I married you, ... — Olive Conway, *Becky Sharp* (してもかまわない)

I am not mad and I know my husband is trying to kill me. — I could try Mr. Cardew at the Tabernale but he wouldn't believe me and Dad's too sensible. I *might as well* be dead. — J. L. Carré, *A Murder of Quality* (した方がましだ)

I told him you couldn't see him, but I *might as well* have talked at the wall of a house. — H. Brighouse, *Followers* (ましだった)

このように *might as well* は叙想法の想念の表現と考えられ、indirect な表現として種々の意味を表わしているのである。

5. 結論

以上まとめると、「*had better*」は叙想法から出発しながらも現在では単一助動詞のように勧告、命令の表現となり、それを和らげるため種々の形式を発達させ、現代口語に於て多用され、多義な表現となっている。*'would rather'* は本来の一義性を保ったまゝ比較、想念の色彩を留めている。*'may as well'* は *may* と *as well* の両方の性格より前二者と類似

点を持ち、多様の意味を表わしているのである。had better が話者の, would rather が主語の intention を表わす表現であることに、両者の類似があるのであるが、had better の neutralization により次のような would rather に類似した例が見られる。

Argyle did some thinking and decided he'd better buy his way out. — E. S. Gardner, *A Cautious Coquette*.

may as well は had better と同様話者の intention であり類似の意味をもち、主張の強さは had better > may as well > might as well である。

would rather と might as well は想念の表現であり、比較の感じは発生的に考えても前者の方が preference が強いものと思われる。類似例は、
 ... but it was only a short way to Dover, and French thought
 he might as well go over and follow it up. — F. W. Crofts, *The Mystery in the Channel*

このように、これら三つの表現はそれぞれ独自の意味範囲とニュアンスを持ちながら互に入りまじるようなところを持っているのである。